

< 国内情勢 >

「フランスの植民地、ベトナムを解放した帝国陸軍将兵」

井川一久さんから聞いた話

(後編)

藤井巖喜 (国際政治学者)

第 34 独立混成旅団の「井川省 (いがわせい) 陸軍少佐」の活躍

歴史的な経緯からいうならば、クアンガイ陸軍士官学校の設立に先んじて語らなければならないのが、井川省旧日本陸軍少佐の活躍である。戦争中、フランス領インドシナ中部を管轄していたのは、**第 34 独立混成旅団**であった。

司令部があったのは、フエという町である。ここに**井川省**という陸軍少佐が参謀として着任したのは、1945 年 5 月であった。先ほど言及したクアンガイ陸軍士官学校第 2 大隊の教官の**中原光信少尉**によれば、**井川少佐**は美術と音楽を愛する知的な人物で、社交ダンスの名手でもあったという。

ある日、混成旅団司令部の前に、物乞いのような風体のベトナム人 3 人が現れ、門を叩いて中に入れてくれと嘆願した。この時、この 3 名の応対にあたったのが、**井川少佐**であった。(ちなみに、井川一久さんと井川少佐は縁戚関係にはないそうである。) **井川少佐**は自分の部屋に招き入れて、彼らの言に耳を傾けた。

彼ら 3 人は、実は**ベトナム独立同盟 (ベトミン)**の活動家であることが後に判明する。3 人は、敵軍の機密に触れるような有用な情報を**井川少佐**にもたらした。その上で彼らは、ベトナム独立運動に対する日本軍の応援を依頼したのである。ベトミン・サイドからすれば、日本軍の司令部にベトナムの独立に同情的な軍人がいるという情報を既に掴んでいたわけである。実はこの 3 人は、モルジブでフランスの監獄に拘留されていたベトミンの活動家であった。

それをどういう経緯かは不詳であるが、アメリカ軍が干渉して解放させ、米軍の飛行機から落下傘降下させてベトナムに戻したというのである。この3人が軍事機密情報の提供と交換に日本軍の協力を求めてきたのである。この関係が戦後におけるクアンガイ陸軍士官学校の設立に繋がってゆく。

井川少佐は日本の敗戦後、旅団の将兵全員を復員船の待つハイフォン港に送り届けた。その後、井川少佐は、勇名を謳われたグエン・ソン将軍と親交を結び、同将軍の最高顧問に就任した。グエン・ソン将軍は、当時、ベトナム人民軍第5軍区司令官であった。

井川少佐は同将軍の最高顧問として中部海岸のビンディンへ向かった。井川少佐の直属の部下だった中川光信少尉は、仲間の下士官数名と共にビンディンに到着した。この時、井川少佐はベトミン兵数十人を率い、自ら軍用車を運転して、防戦指導の為、中部高原へ出発するところであった。

山道にはフランス軍の切り倒した大木が行く手を遮っていた。井川少佐は軍用車を降り、後続のベトミン兵に退避を命じたが、そこへ敵軍の機銃掃射が襲い掛かり、彼と若いベトミン兵1名が命を落としたのである。これが井川少佐の最期であった。しかしその井川少佐の志を継ぐ形で、クアンガイ陸軍士官学校が設立されたのである。ちなみにベトナム中部海岸のクアンガイは砂糖とウコンの産地として知られている。

井川一久さんについて

井川一久さんとは、以前から親交があった。元朝日新聞外報の記者で、朝日ジャーナルの副編集長というので、よっぽどガチガチの左翼の人かと思って警戒していたが、実際にお会いしてお話してみると、中々のナショナリストである。ある月刊誌が縁で、度々、お会いすることになったのだが、井川さんがナショナリストになった経緯は、私の視点から見ると以下のようなことになるのではないかと思う。

井川さんは昭和9年の生まれで、かなり確信的な左翼主義者であった。

当初はイデオロギー的な視点から、ベトナム戦争の取材に赴かれたようだ。

しかしベトナム戦争を取材してゆくうちに、世界最強のアメリカ軍に立ち向かうベトナム兵を支えているのは、決して共産主義思想ではなく、ベトナムの民族主義思想にあることに気が付かれたようである。

そしてまた、ポルポトのカンボジアとベトナムが表面的には共産主義の看板を掲げながら、如何に異なった国であるかも実感されたようである。

ある時、井川さんが洩らされた言葉だが、忘れられない台詞がある。それは、ベトミンに捕まった西側のジャーナリストは命を奪われることなく皆、無事に帰還している。逆に、ポルポト派に捕まったジャーナリストで生きて帰った者はいないというのである。毛沢東原理主義・共産主義原理主義のポルポト思想のもとでは、民族主義は皆無であり共産主義のドクトリンに反するものは皆殺しにされる運命であった。それに対しホーチミンは、表向きは共産主義を掲げながらその本音は民族主義で、大義達成のためには極めて柔軟な戦略戦術を用いている。ベトナム戦争中は、寧ろ敵国であるアメリカの中にベトナム独立に対して同情的なアメリカ人を作り出すことが彼らの戦略の1つであった。

ベトナムの戦場においては、彼らは果敢で狡猾なゲリラ戦を仕掛けたが、アメリカや西側諸国でテロを実行することはなく、先進国における平和運動を鼓舞して、米軍の足を引っ張る戦略に出た。ホーチミンやポー・グエン・ザップはオサマ・ビンラディンよりもはるかに優れた戦略家である。

ベトナムに同情的だった日本国民

筆者はベトナム戦争中の奇妙な日本世論の動向を思い出すことが出来る。日本政府としては勿論、反共産主義が建前でありベトナム共産主義者と戦うアメリカ軍を、日米同盟を基礎に支援する立場であった。日本の国民の大部分も、その立場に異論はなかったように思う。

しかし連日、B52による北ベトナムへの無差別爆撃をニュースで知らされた日本人は、実に嫌な気持ちになっていった。それは大東亜戦争末期における米軍のB29による日本の大都市への無差別爆撃を思わせたからである。北ベトナムは弱い小さな国である。そしてアメリカ本土を攻撃しているわけではない。

にも拘わらず米軍は最新の兵器を用いて、北ベトナムを連日の如く無差別爆撃している。どうもアメリカのやっていることに無理があるのではないか。

ベトナム人が可哀想だ。そういう心情に、日本人の多くが傾いていったのである。当時、ベトナム反戦運動なるものが日本でも盛んで、旧左翼・新左翼ともその旗振り役で、反米活動を続けていたが、私が言及しているのはこの人たちのことではない。寧ろ左翼の反米活動に背を向けながら、心の底でベトナム

に同情を寄せていた日本のサイレント・マジョリティのことである。日本人は大東亜戦争末期の米軍による無差別爆撃の記憶が当時はまだ生々しかった。

日本が降伏した 1945 年とベトナム戦争激戦期の 1970 年の差はたったの 25 年である。1945 年に 20 歳だった若者は、1970 年には 45 歳になっていた。

ごく普通の、そして戦争体験や戦争の記憶をもっている人たちが、「**かわいそうなベトナム**」に非常に同情的だったのである。逆にいうとアメリカが強者の傲慢に陥り、ベトナムの戦争の実態が見えていないのではないかという危惧を、当時の大人の日本人たちは持っていたように思う。

日本政府は口が裂けても、北ベトナムに同情心を寄せることはなかったが、日本国民の間に何とはなしに反米感情というよりはベトナムに対する同情心が、蔓延していたのは事実であるように思う。歴史の真相を発掘してくれた**井川さん**のお陰で、実は日本とベトナムが深いところで結びついていた事実が明らかになった。ベトナム戦争での体験を通じて、**井川一久さん**はスッカリ、ナショナリストに変貌されたように思う。それは進歩的なナショナリストであるが、左翼の教条主義者ではまったくない。

世界各国のナショナリズムの正統性を理解するナショナリストである。そして大東亜戦争で掲げた日本の大義には、それなりの歴史的意義があったのだということを現在は強く訴えられている。日本人は植民地化されていたアジア諸国の独立を促し、そのために相当の血も流した。アジア独立の戦いは日露戦争で終わったわけではなく、大東亜戦争にも継続されていたのである。しかし何故か日本人は、この誇るべき歴史を忘却している。

敗戦後、「**平和主義**」に逃げ込んだ日本人には、幕末以来の日本人の苦難の道のりが全く見えていない。そして、それと歩みを共にしたアジア人の心情も無視している。それどころか人種平等世界の実現という日本の大義に背を向け、幻想的な一国平和主義の中に自らを隔離している。「**引きこもり**」である。それが現在の**左翼小児病症候群**である。

中華帝国主義と日本の責任

日本はアジアの国に対して、大きな責務があるのではないだろうか。大東亜戦争で植民地の自立を促した日本は、その理想を継続して担ってゆかなければならないだろう。21 世紀に入り、アジアには恐ろしい帝国主義・軍国主義の

国家が猛威を振るっている。いうまでもなく中国共産党帝国である。日本の努力もあり、西洋白人の帝国主義は、アジアからは姿を消したが、そのアジアでチャイナ版の専制主義が周辺諸国ばかりではなく、国内の少数民族をも弾圧し続けている。そもそも**南モンゴル・チベット・東トルキスタン（ウイグル人居住地）**は、漢民族にとっては外国であり、その外国人の領土を侵略併合して、現在の中共帝国は成立しているのである。そしてかつて白人植民地帝国も行なってきたような、残虐な支配行動を国内で行ない、更にそれを国外に輸出しようとしている。

現在この中共帝国の前に、大手を拡げて阻止しようとしているのが、アメリカである。トランプ前大統領はこの意志を明確にしようとした。隠れ親中派のバイデン大統領は、トランプほど断固とした態度をとっていないが、米中対決の軌道を外れることは出来ない。ここにおいては民主政治と全体主義が、そして自由と統制が真っ向から対立しているからである。そしてヨーロッパの西側先進国も概ね、現在の中国共産党帝国の行き方には批判的である。しかし考えてみれば、本来、日本がもっと大きな役割を果たさなければならない。

本来、中国共産党帝国を打倒するのは、アジア民主化・近代化の盟主、日本の役割である。日本がシッカリしていれば、アメリカの手など借りなくても、中共の抑え込み、そして共産党独裁体制の解体を実現して然るべきである。

大東亜戦争を戦った日本は、その最終的な結果にまで責任をもたなければならないだろう。大東亜戦争の最終結末が、中国共産党によるアジア制覇であってよいわけがない。東アジア全体が中共帝国の版図となるような事態は、日本が主体性をもって阻止しなければならない。そればかりでなく寧ろ 3000 年にわたって政治的自由と寛容に無縁であったチャイナに、特に漢民族に、自由と寛容の歴史を教えなければならない。現在の中共帝国のありようは、古代の皇帝国と全く瓜二つである。近代的要素は僅かながらも存在しない。

チャイナでは、国民意識の中に公というものが存在していないことが、そもそもの問題である。国家権力イコール皇帝権力であり、それは現在では、習近平皇帝の権力である。秦の始皇帝がチャイナを統一して以来、歴代王朝は、皇帝の絶対権力のもとに官僚制度を組織し、その官僚が人民大衆を支配するというシステムを採用した。

採用したというよりは、それ以外に統治の方法を知らないのである。王朝の主人公が元朝や清朝のように他民族である場合すらある。それでもこの皇帝独裁制度の仕組みは一貫していた。現在は中国共産党によって世襲的皇帝制度が破壊され、王朝が存在しないだけであり、皇帝絶対権力のもとでの官僚制が支配を完結するという仕組みは、全く不変である。

この官僚制度の中心が中国共産党である。中国共産党のエリートは、かつての科挙の試験に合格した歴代王朝の秀才官僚さながらである。ここには、公共性も民主制も近代性も全く存在していない。我々は古代帝国と戦っているのである。井川さんによる歴史の発掘は、今まで盲点となっていた、日本とベトナムの関わり合いを明らかにしてくれた。その視点から見ると、大東亜戦争から現在に至る歴史は、一つのパースペクティブの下で一貫してみる事が出来る。

井川さんは長い対談の後、以下のように締め括ってくれた。

—完—

<日本人が歴史から学ぶ教訓について>

「……むずかしい問題ですが、長年アジアの戦乱を見続けてきた古参のジャーナリストとして一つだけ挙げるとしたら、それは日本人としての責務の意識なのではないでしょうか。そういう意識を後続の同胞に期待して、この短い記録を閉じたいと思います。」

追記：

ベトナム戦争といえば、ベトナム兵のゲリラ戦争が有名だった。では、クアンガイ士官学校では陸軍中野学校流のゲリラ戦術が教えられたのか、というと必ずしもそうではなかったようだ。井川一久さんによれば、「陸軍中野学校出身者も若干、いたようですが、中野学校の影響力が強かったようにはあまり思えません」とのことである。